

美的認識と想像力

—つくる力と見る力の育ち—

西村 隆 司

はじめに

「人類の表現の変遷は、子どもの表現の発達過程に似ている」といわれることがある。

人類が何万年と営々と築いてきた表現の変遷を、わずか10数年の子どもの発達過程と同等に扱っていいわけがない、そう考えるのも当然といえば、そのとおりである。しかし、物事が変遷する過程においては、物事を認識する力とそれを変革する想像力が働くことは、歴史が教えてくれているし、その想像力には、イマジネーションつまり想像力が強く働いていることも私たちは、過去を学ぶことで理解している。

子どもの表現の発達の過程においても、「見ることは言葉よりも先に来る。子どもはしゃべることができるようになる前に見、そして認識する^[1]」といわれているように、物事を認識する力とそれをよりよいものにしようとして創造力が働いているといわれる。

昨今、子どもの学力低下が危惧されているが、美術・図画工作科でいえば、子どものつくる力と見る力の低下も認めざるを得ないのが、現状である。そのもととなる原因を探り、子どもへ返すことが、今美術・図画工作科に求められていることの一つである。現行小学校学習指導要領の図画工科の目標にも「表現と鑑賞の活動を通して…」とあるように、私は、以前よりつくる力と見る力に注目してきた。そして、この力の育成には、美的認識と想像力が必要不可欠なものとして考えている。しかし、どのような美

的認識と想像力が働くことで、子どものつくる力と見る力が育つのかということについては、一つ一つの題材においての検証は行ってきたが、子どもの表現の発達過程においてどのような美的認識と想像力を働かすべきかを未だ検証していなかった。

本稿では、冒頭で掲げた「人類の表現の変遷と、子どもの表現の発達過程」の類似性と、そこで働く美的認識と想像力を考察し、子どもの表現力の育成の一助になるようにしたいと考えている。

1 美的認識と想像力

(1) 美的認識

現代においてよく使われる言葉に「エステ」がある。美しくなるために、女性だけでなく、今では男性もよく通うところかもしれないが、この「エステ (aesthe)」は、aesthetic「美的」という英語からきたものであり、またこの言葉は、『ギリシャ語の「理解すること」や「気がつくこと」を意味する言葉である。木でできた球とガラスや瀬戸物でできた球を比べれば、視覚、手触りや重さなどの触角、そして嗅覚まで利用して理解することができる。美的という言葉には、単に「美しい」という意味ではなく、これらの感覚的理解を意味しているといえることができる。』^[2]という意味を含む。人間は、美的なものや美的なことを求めたり、つくり出し

たりしようと本質的にするものである。また、自分と他のものとのかかわりを読みとり、様々なものを創造することで環境に適応し、よりよく生きていこうとしてきた。これは、造形という限られた場合のことだけではない。日常生活の中で食器や服を選んだり、部屋の模様替えをしたりするときに、あれこれと考えるように、誰もが自分の思いに合ったよりよいもの、より美しいものを求めて生きてきた。つまり、文化の伝承と同時に、文化の創造を教育の中に取り入れてきたのである。

子どもについても同様である。赤ちゃんは、目に見えたもの、手で感じたものを何でも口にする。口にすることで、それが快いものかそうでないかを認識する。大きくなるにつれ、箱に窓がついているものを家と認識する認知的視覚としての「見る」ということだけではなく、その箱の形や窓の位置が自分にとって素敵で、入ってみたい、住んでみたいとか、つくってみたいとかという思いにかられる美的視覚としての「見る」という意識が生まれる。なぜなら美的視覚は、それが、「〇〇が気持ちいい、〇〇が美しい、〇〇をやってみたい、またはもっとこうしたい方がいい」という新たな動機や価値を生み出すからである。

この「美的視覚」から生まれる「美的認識」は、日常のあらゆるところに存在する。子どもは、身近にある材料を手にして描いたり、さわることを楽しんだりする。言い替えれば、子どもは常に美的あるいは創造的なものをつくりだそうとしているといえる。そして、その活動には、必ずその子どもなりの意図が生まれてくる。子どもは小さい頃から、ものを集めたり並べたりするようになる。また、積み木を持って車に見立てて遊んだり、親のまねをしたりするようになる。これは、ごっこ遊びとも言われるが、造形活動とも言える。「集める、並べる」「見立てる」「まねる」といった子どもなりの意図を

持った活動は、色や形に関する思考としてすべて美的認識につながるものと考えられる。

このように考えると、美的認識と「感じること（感性）」の関わりも大きなものといえる。人間には、5感（視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚）がある。普段生活していく上で重要な感覚であるが、同じものを見たり聞いたり触ったりしたとき、すべての人が同じように感じる場合と、一人一人が違って感じる場合がある。人間において大切なのは、両者をバランスよく育てることであり、これを「美的感覚」とか「造形感覚」という。

しかし、この感覚や感性は、まさに環境が大きく関わっているのであって、何もせずに放っておけば、これらは鈍化の道をたどるのではないだろうか。「私たちは感性のブームを体験しており、感性化の時代を生きっていると唱えているが、むしろ、感性化はまさに巨大な無感性化へと転化している。^[3]」とW.ヴェルシュが語っているように、むしろ最近の傾向として、無感覚、無感性になっていっているのではないかとさえ思われる。このように、今日の社会においては、この子どもの美的認識を育てる場が少なくなってきた。自然や遊び場が減っただけでなく、子どもの生活は分刻みで区切られ、美的あるいは創造的なものと接する機会も奪われてしまっている。

しかし、子どもは、時として大人が感じ得ないことを口走ることがある。つい大人は、子どもは感性豊かだという錯覚に陥ってしまう。危険なことである。なぜならば、海を知らない子どもに、海の色は描けないのは当たり前であり、アニメに出てくる海の色が海の色であると理解してしまっている子どもの海の色を、私たちは否定できない。認知的視覚の場を子どもから奪っている現実があるからである。私たちが子どもから本来あるべき姿を奪い、別なものを与えている現実気づくことは、とても大切な

ことである。大人であれ、子どもであれ、生あるものはすべて、意識するしないにかかわらず、常に本能的によりよい状態、快い状態を願いながら生きていることは間違いない。大人が考えているような美的であるかどうかは別として、子どもがものやことに対して積極的ににかかわっていかうとし、主体的な意識の高まりのもとに判断していくことは、まちがいはなく子どもの「美的認識」である。人間として、本能的なことであり、不可欠なこの美的認識は、美術・図画工作科の活動でねらっているものと同じものであると言うことができる。小学校において美術教育の本質が問われている今だからこそ、子どもの豊かな成長のためにも、この美的認識を重視しなければならないと考える。

(2) 想像力

想像力とは、一般に「実際に経験していないことを心に描くこと、知っていることをもとにして新しい観念を作ること」^[4]である

また、「見」とは、目と人が合わさった漢字で、人が目でみること、人の目に映ることであるが、転じて、視覚によってとらえる、判断する、目にとめて知る、ながめる、視覚以外の感覚によって、物事をとらえる、取り扱う、調べる、という意味も持っている。「見る」ことには認知、判断、観察といった意味が含まれている^[5]ことは、私たちの日常生活の中での行為を振り返ればよくわかる。

そして、この「見る」行為には「想像力」が働いているということもいえる。人間の知覚というのは、○は○であると見えるというのが一般的であるが、はじめ○を○と見ていたものが○ではなく何かの穴に見えてくる。人は、この○ではなく穴に見えてくる働きによって自分の活動の可能性を広げもし、反対に狭めもしている。

また、小笠原氏は「想像力とイメージブレイン」の中で、想像力＝「連想、予想、見立て、結合」

の4つの要素をあげている^[6]。10数年前に、映画「ジュラシック・パーク」の原作者マイケル・クライトンの想像力には驚かされたことがあった。考古学と遺伝子工学の理論を結合させ、こうなるであろうと予想を立て、その場を連想し、生き物を見立ててつくられた映画は、スピルバーグ監督のもと見事に我々の目の前に恐竜を出現させたのである。「恐竜の卵発見……」から始まる、同時期に公開された日本映画「恐竜物語」との違いをまざまざと感じたものである。

2 先史・古代に見られるつくる力・見る力

紀元前1万数千年前の旧石器後期の洞窟画を美術・芸術と見るか否かの議論はここではさしおき、人類最初の表現と見ていいラスコーやアルタミラの洞窟画は、当時の生活、狩猟の様子を誠に写實的に表現している。やがて、中石器時代から紀元頃に現れる岩面画を見ると、あの写實的な表現は姿を変え、形の抽象化つまり、初の抽象絵画が生まれた。(写真1)と(写真2)を比べてみるとわかるように、(写真2)では、形がかなりデフォルメされている。写實的に描かなくても、見ただけでそれが何を表しているかわかる共通項が、その当時の人類に伝わっていたとも考えられる。現代における絵画の記号論的発想はないにしても、人々の知的認識はかなり発達し、人や動物の配置や数などから美的認識による画面の構成もかなり読み取れる。

この抽象化させる力、つまり想像力が、次の文字を生み、貨幣を誕生させ、人類の発展に大きく寄与したと言っているだろう。

そして、エジプトの壁画やウルの遺跡に現れる横向きで少し動きや装飾のある表現が生まれた。(写真3)ここには、また、単純化された形の中に装飾的な美的認識が読み取れる。写実



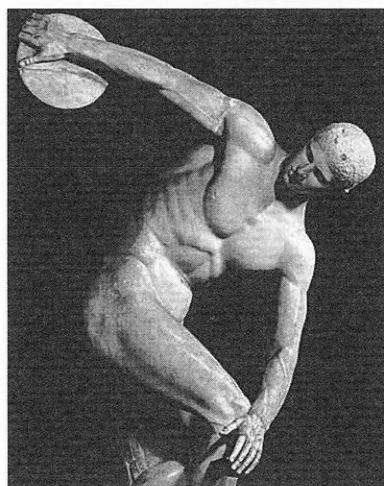
(写真1 アルタミラの洞窟画)



(写真2 セファールの岩陰画)



(写真3 ウル遺跡武装槍兵)



(写真4 ギリシャの彫刻)

感ある人物の他、その下部にある三角を並べた模様は、現代のデザインを彷彿させる。装飾は、もっとこうしたら美しいだろう、心地よいだろうという想像力の結果と言っていい。

続いて、ギリシャ・ローマ時代の写実表現、3次元表現へと発達していく。(写真4) このギリシャ・ローマ時代の写実表現は、後世において美術の古典として長く人類の美術界に君臨することになるのは、周知のことである。

このように、人間は、「見る」ことを通して、写実を好み、またそこからある共通のものを導き出し(抽象化し)、さらにそれを自己に取り入れ、意味づけをしてもものをつくり出すことを繰り返しながら、表現を発達させてきたのである。

ジョン・バージャーは、次のようにいっている。「イメージとはつくり直された、あるいは

再生産された視覚だ。それは、最初にあられ、受け止められた場所と時間から、数瞬または数世紀も引き離された概観である。すべてのイメージはものの見方を具現化する^[7]」。

3 子どものつくる力、見る力

子どもとの関わりの中で、子どもの表現の発達過程が、人類の美術・芸術的表現の変遷とよく似ているということを最近よく感じてきた。

子どもの表現の発達の研究は、リードやリュケ、ローウェンフェルドなどの先人が行っているが、そこで明らかになっているその発達過程が、人類の美術・芸術的表現の変遷とよく似て

いるということを、ここでは、ローウェンフェルドの「子どもの描画発達」^[8]とK児の作品をもとに見ていき、そこに働く美的認識と想像力を考察していくことにする。

ローウェンフェルドは、「子どもの描画発達」を

(1) 錯画期 (2-4 歳)

……………資料 1 (K 児 2 才の時の絵)

(2) 象徴期 (3-4 歳)

……………資料 2 (K 児 3 才の時の絵)

(3) 前図式期 (4-7 歳)

……………資料 3 (K 児 5 才の時の絵)

(4) 図式期 (7-9 歳)

……………資料 4 (K 児 7 才の時の絵)

(5) 初期写実の時期 (9-11 歳)

……………資料 5 (K 児 10 才の時の絵)

(6) 擬似写実の時期 (11-13 歳)

……………資料 6 (K 児 13 才の時の絵)

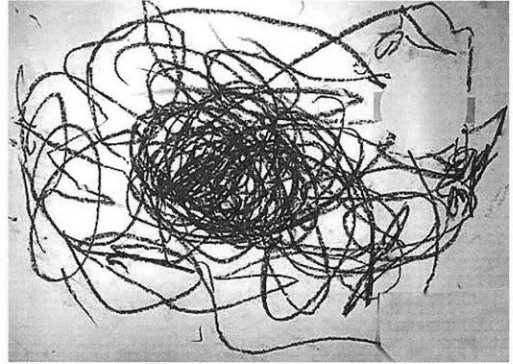
(7) 決定の時期 (13-17 歳)

と段階づけている。

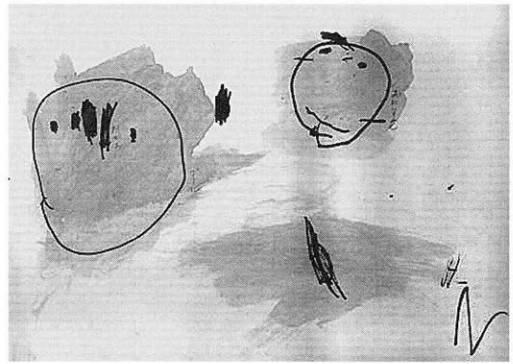
(1) 錯画期 (2-4 歳): 腕の上下運動によって残る点、左右に動くことによって残る線、1つの点から線へ、1本の線から複数へと線の描き方は増え、単なる線から曲線、閉じた線、そして始点と終点が一致する円へと発達していく。円を描くことは手と目が連動して動くことの証明であり、この段階の終わりを意味する。こうした一連の表現を「なぐりがき (スクリブル)」と呼んでいる。

K 児: はいはいが終わり、立って歩くことができるようになった。手を動かし、画面いっぱいに線を描いた。ただ描くことに集中していた。真ん中に集中していたものがやがて回りにはみ出していった。

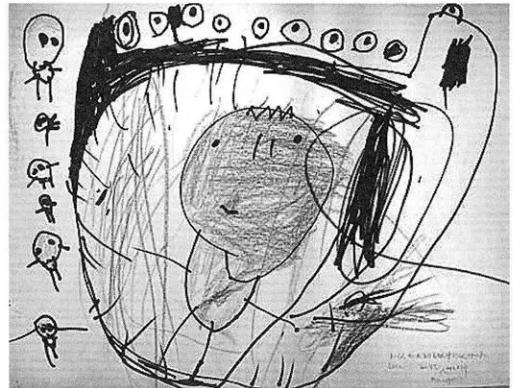
絵として現れた表現については「アルタミラの洞窟画」(写真 1)と比べられるものではない。しかし、自己の腕を動かせばその軌跡が形に現れ、その軌跡を楽しんでいる K 児の様子には、文字もなく初めて「絵」という表現と出会った



資料 1 K 児 2 才の時の絵



資料 2 K 児 3 才の時の絵



資料 3 K 児 5 才の時の絵

喜びや楽しさを洞窟画に残した古代の人類の様子と共通するものを感じる。

(2) 象徴期 (3-4 歳): 手と目が連動して動くことで子どもは自分の思うような線を描くようになる。しかしまだ具体的なものをかく

のではなく、描いたものに何らかの意味づけを行う。

K児：丁寧に円を描くことができた。左は「お父さん」、右上は「いもうと」を表していると言った。色はまだ塗れない。

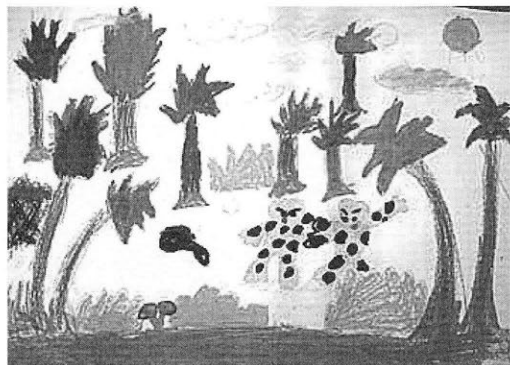
形を閉じる表現を見つけ（美的認識）、そこにまた形を描き加え、こちらからの「これは誰？」「これは何？」という問いかけに対し、そこに現れた形に意味づけをするK児の行為（想像力）があった。これは、写実的な絵を描かなくとも牛や馬、人間の形を抽出すること（美的認識）でそれが何を表しているかを表現できるようになり、また、その意図が人に伝わると認識した表現方法（想像力）を、前出の「セファールの岩陰画」から読み取れる。

（3）前図式期（4－7歳）：画面上に羅列された描線はイメージ相互に関係なくバラバラに並置されているため「カタログ期」とも呼ばれる。この時期の特徴的なものに目や口のある頭部から手足の生えた「頭足人」がある。象徴期に比べて具体的な人間の姿を描くようになる第一歩である。

K児：とにかくいっぱい絵を描くようになった。描きながらこれは何、これは誰と説明してくれる。色も形に収まって塗ることができるようになった。

表すことができる形は少ないものの、同じ形を並べたり、強調しようとしたり（美的認識）しながら、前段階同様そこに現れた形に意味づけをするK児の行為（想像力）は、写真3（ウル遺跡武装槍兵）に見られる単純化された形の中に見られる装飾性（美的認識）とその配置のおもしろさ（想像力）と通ずる表現のおもしろさがある。これは、次の図式期にもいえることである。

（4）図式期（7－9歳）：この時期には、1枚の「絵」という意識が現れる。画面に対して自分の位置が明確になるとともに、空間意識



資料4 K児7才の時の絵



資料5 K児10才の時の絵



資料6 K児13才の時の絵

が生まれる。画面の上下関係が確立し、紙の下方に地面を表す線（基底線）が描かれるようになる。しかし奥行きに関する意識はあまりない。

K児：小学校において描いた絵である。動物を人間のように描いた。地面を描かないと気持ちが悪いようだ。ものを選んで描いているようにも思える。

画面の構成という感覚（美的認識）に目覚めたようなK児の表現は、物語を構成し（想像力）そこに生命を与えている。表現の内容は異なるものの前段階の前図式期（描くものを意味なく配置する時期）と合わせて、やがてはその位置や構図にも意味を持たせていくこの時期の表現は、前述のように写真3（ウル遺跡武装槍兵）に見られる表現の意図と通じているのではないだろうか。

（5）初期写実の時期（9－11歳）：心と体の成長に伴って客観的な認識と思考が高まってくる時期である。それまで描いていた主観的な世界から、自分の目で見える世界を描こうとする傾向が強くなる。空間におけるものの重なりや大小の関係など、遠近感の表現もできるようになる。

K児：これも小学校において描いた絵である。よくある題材「ヘチマ」。ものの重なりを少し意識してかけるようになっているのがうかがえる。しかし、顔の表情は無表情に近い。

この時期の特徴である顔の無表情さは、写真3やエジプト期の人物像ともよく似ている。しかし、ものをよく見てその特徴を正確に描こうとする（美的認識）傾向が強くなるとともに、空間認識が生まれ重なりや遠近を表現しようとする（想像力）この時期から、ギリシャ・ローマ期のような写実性も芽生えてくる。

（6）擬似写実の時期（11－13歳）：知的な能力の発達に伴い、観察力、判断力が高まり、合理的・客観的な表現をしようとする。正確な

再現的表現を好む傾向が見られる反面、絵を自由な発想（構図や配色）で描くことが減少していく。

K児：父が絵を描いているのに触発されたのか、その横で、同様の絵を描いた。真似をしようとして一所懸命であった。

より見たままを描きたい（美的認識）としてK児が真似という方法を選びながらも表現した作品は、写真4（ギリシャの彫刻）のように肉体の再現から創造への思いが感じられるものである。

（7）決定の時期（13－17歳）：社会的関心が高まるとともに自分の周りのファッション、デザイン、芸術作品等に対する関心も高まる時期である。しかし意識的に何かを表現しているという際、それに伴うテクニックの未熟さからうまく表現できずに悩むことが多くなる。技術の未熟な生徒は再現的な表現よりも空想画やレタリング、デザイン等の構成的作業への興味が高まる。

K児：残念ながら、この時期の作品がない。写生に自分は向いていないと落ち込んだりしていたが、イラスト、アニメには興味を持ち、毎日描いていた。

約10年余のK児の表現の発達を見てきたが、はじめは、腕を動かした軌跡が絵となり、そのときはただただその軌跡を楽しんでいた。それが、線が現れることの心地よさを十分味わわせることで、やがて直線が曲線となり、開いた形が閉じて描かれるようになった。形が閉じることで、ものの形を認識し、やがて、形の特徴をつかみそれに意味づけを行うようになっていった。このころから、その形もより明確に描かれるようになったが、ある意味これは、形の抽象化といってもいいのではないだろうか。この自分の思った形を描いているとき、K児は、自分の美的認識と想像力を最大限に働かせていた。単に、腕の軌跡が絵になるのではなく、自分の

意思により形を抽出できるからである。そして、再び見たものを忠実に描く(写実)ようになる。このころは、ものの重なりが認識できるようになって、見えるものと見えないものを識別できる喜びをよく語っていた。そして、現在、自己の表現の可能性を探っている。

このようなK児の表現の発達は、前述したように人間の表現の変遷にも似ていると感じた。数千年の歴史と10数年の歴史を比べることはナンセンスに近いものの、ただただ見たもの感じたことを絵に描いた時代から、やがて形の抽出の時代、そこでより洗練されていく形の中で、再び見たもの感じたことを忠実に再現しようとする時代と変遷する様子は、一人の人間の成長に似ているのではないだろうか。

そして、現代芸術のもつ意味は何か。絵画なのか立体なのか、創作なのか既製なのか、わからない領域のボーダレス化。表現を見れば意図がわかる作品と作者の意図がなかなか読み取れない作品、表現とは何か(美的認識)を常に問う現代芸術の世界は、今の若者の精神世界をよく表してはいないだろうか。現代芸術の世界を読み解く鍵は、人間の想像力にあるとすれば、子どもが青年となりやがて成人となるための鍵も、想像力にあるといってもいいのではないだろうか。そのためにも、人間が見てきたものつくってきたものを振り返り、今何をなすべきかを考えることが、子どもの「見る力」「つくる力」を育てることになるであろうし、それがまたこれからの社会をつくっていくことになると思う。

まとめ

「人類の表現の変遷と、子どもの表現の発達過程」には若干の差はあるものの、類似性が見えた。形の表現、形の抽出という美的認識の過程において、意識的に行うか無意識的に行うかの違いはあるものの、意味づけを行うという想

像力を発揮することがわかった。また、形の抽出から再び具象に向かう美的認識は、見えるものと見えないものの認識と同時に展開されることも見えてきた。

前節で「人類の表現の変遷と……」とかなり大きなことを述べてしまったが、ここで言えることは、一つの題材(その時代時代の作品)において、その中で働く美的認識と想像力を明らかにし、それを指導に生かすことでつくる力と見る力を育成するという横糸と、個々の子どもの表現の発達過程に働く美的認識と想像力を明らかにし、それを指導に生かすことでつくる力と見る力を育成するという縦糸をうまく織り込むことで、個々の子どもに「学力(美術でいう表現力)」を育むことができると考える。

本稿では、抽出したのはK児1名であったが、今後、いろいろな発達特性を持った子どものその時々表現を見ていくことで、個に応じた指導がより可能になると考える。

また、今回取り上げなかったルネサンス以降、印象派の登場に始まる表現形式やものの見方感じ方の多様性と青年期の表現の発達過程とを考察し、表現の発達の変遷時に働くその当時の人々や作家の美的認識と想像力を、さらに深く追究していきたいと考えている。

【注】

- [1] ジョン・バージャー「視覚とメディア」 P.9 PARCO出版 1998年
- [2] 宮脇 理「小学校図画工作科教育の研究」 P.152 建帛社 1993年
- [3] W・ヴェルシェ「感性の思考」 P.9 勁草書房 1998年
- [4] 小学館「新選国語辞典」 p.648
- [5] 前掲書「視覚とメディア」 P.8
- [6] 小笠原浩方「想像力とイメージプレイ」 PP.22-27 パステル書房 1991年
- [7] 前掲書「視覚とメディア」 P.12
- [8] ヴィクター・ローウェンフェルド「美術による人間形成」 PP.131-488 黎明書房 1995年